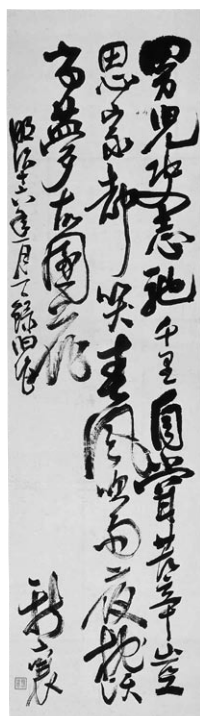


男児決志馳千里
自嘗苦辛豈思家
却笑春風吹雨夜
枕頭尚夢故園花



石田 信博（大学商学部教授）

35年前、函館の港にある「新島襄海外渡航乗船之処」碑を初めて訪れた。薄暗くなり始めた夕刻であった。古い港に漂う物悲しい空気のなか、その碑は建っていた。長い間見上げていたそのうち何かを畏れるような感情が湧いてきたのを覚えている。同志社の学生でありながら、それまで関心のなかった私は初めて新島襄を意識した。

その碑にはこの詩が刻まれている。新島が脱国して渡米する途中、香港で詠んだ詩である。大志を抱き遥か遠くの地へ向かっている。自ら選んだ辛苦である。家族のことなどは思っていない。しかし、風が吹き、雨が降る夜には、故郷を夢にみる。このような趣意であろう。

新島は「千里の志」を抱き続けていた。高尚な理想を求め、どこまでも駆け巡ったのである。志を遂げるために自らを厳しく律した新島でさえも、困難に立ち向かう際には一抹の不安や寂しさを覚えるのであろう。誰しもがもつ繊細な気持ちが率直に描かれていて、親近感が湧いてくる。同時に、たとえ厳しく辛い情況に置かれていたとしても、家族、友人、隣人を常に思いやることの大切さを確認させてくれる詩でもある。

碑に刻まれた詩を、35年前には読んだのかどうかは覚えていない。しかし、詩に詠まれている新島の厳しさと優しさと心の大きさが、畏れる気持ちを私に覚えさせたのかもしれない。